
ココロのゆくえ

向日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「口のゆくえ

【著者名】

向日葵

【あらすじ】

夏真っ盛り。楽しみにしていた臨海学校で、アタシを悩ませたアタシの「口のゆくえ」。

自サイトにて既に公開済みの作品です（2009/07/25）

第1話

なによつ、シンジつたらあんなにトントンしちやつて。
あの女も、あの女よつ。ちょつと人氣あるからつて、いい氣にな
つて。

「よろしくね」

「うわうわ、よろしく

顔赤くしちやつてや。

「うめんね、アスカ！」

いいわよ。ヒカリがそんな風に手を合わせて謝つてくれなくたつ
て。

アタシは別にシンジとペアになりたかつたわけじやないもの。

「クジ引きに細工したはずだつたんだけじ、どつかで手違いがあつ
たみたいで、アスカが引くはずだつたクジを……おまけにアスカが
あれを引くなんて……」

だから、別にいいんだつてば！

アタシは相手がシンジじやなくたつて全然構わないの！

ただの肝試しじやない。二二二を一周するだけでしょ。そんなの誰
が相手だつて、関係ないわ。

だけど……ペアは男女つて、誰が決めたのよ？

学校の伝統行事だかなんだか知らないけど、なんでわざわざペアを決めて肝試しするのよ？ そんなの一人で回ればいいじゃない。たかが肝試しよ。肝試し。ペアである必要がビリにあるって言つりよ？

どうせ女子が「きや～つ」とか「こわい～」とか言つてんのを、バカな男子が可愛いとか思つちゃつたりするんでしょ。

ふんっ、くだらない。アタシには関係ないことだわ。

だつて、そうでしょう。仕方ないじゃないつ。アタシには全然関係ないのよ。

アタシって昔からクジ運悪いんだから。こんなことになるんだつたら、初詣で大吉なんて引くんじやなかつた。あんなところで運を無駄に使つてや。

みんな勝手に楽しくやつてればいいじゃない。だつて、アタシには関係ないんだもの。

アタシは、アタシは……アタシはお化け役なんだからつー！

* * *

真つ青な空の下、アタシたちを乗せた大型バスは、一路海を目指していた。

今日から3日間、第三新東京市立第壱中学校第2学年恒例の臨海学校が行われるのだ。

3年生の修学旅行以外では唯一の泊りがけの行事。学生の期待も半端ではない。

その理由は、田原は縁遠い海の近くで開放的な気分に浸れるとこと、そして初めてクラスメートと共に夜を過ごすということ。何よりも多くの学生が楽しみにしているのは、最終夜に行われる「肝試し大会」。嘘か本当か、毎年この「肝試し大会」をきっかけに、多くのカップルが誕生するのだ。

恐怖体験は他人との親密さをより深くするつていうし、あながちない話しではないわよね。

もちろん今年の学生たちも、それを一番の目的としてるみたいで。

「ねえ、ねえ、ヒカリ。ヒカリはビックリするの？」もちろん鈴原に告白するんでしょう？」

例に漏れず舞い上がっていたアタシは、隣の席で窓の外を眺めているヒカリの脇腹をコツコツと肘で突付いた。

「えっ、そ、そんなことしないわよ。だって鈴原、私のことなんてなんとも思ってないと思つし……」

突然の質問に顔を赤らめて、ヒカリは慌てて首を振る。

「なあに言つてんのよ。鈴原だつてヒカリのこと好きに決まつてんじゃない。じやなきや、あんなにヒカリのことばっかり見てないわよ。ほりつ」

そう言つて、アタシは座席から通路に首を出して、車内後方を振り向く。

一番後ろの席に並んで座つてゐる3バカトリオのうちの一人と曰が合つたので、お互に軽く手を振つてからヒカリに向き直つた。

「ほらほらよなさい。やっぱり鈴原のやつ、いつかばかり見てたわよ。ヒカリが気になつてるのよ」

「それはアスカが顔を出すからでしょ。そんなの誰だつて気になるわよ！」

そんなのアタシだつてわかってる。でもこの一人がお互い好きあつてるというのは、間違いない。

それなのにヒカリも鈴原も煮え切らない態度をとつてるから、アタシが誘導してあげてるのだ。

まあ、簡単に言つとお節介つてやつ、いつこうのつて、きつかげが必要だと思うし。

ほら、誰かがチヨンと背中を押しただけでトントンと物事が進むつてことがあるでしょ。

「それよつ、アスカはどうなのよ？」

「へつ？ アタシ？」

「そうよ。アスカの方こそ、碇君に告白しないの？」

「な、な、な、何言つてんのよ、ヒカリー！」

「だつて、好きなんですよ。碇君のこと」

「ぜ、全然好きじゃないわよつ、あんなやつー。」

「とてもそんな風には見えないけど。いつもすくじ仲がいいじゃない。今だつて手を振つたりして。

鈴原を見たつて言っておきながら、本当は碇君を見たかったんじゃないの？」

ヒカリはクスクス笑いながら、アタシの顔を覗き込んだ。
それは真実ではないと思ひながらも、言い返せないのはなぜだろう。

ヒカリのいつ「碇君」とこいつのは、さつきアタシが手を振つた3バカトリオのうちの一人だ。名前を「碇シンジ」と言つて、うちの隣に住んでるアタシの幼馴染。

いつも鈴原と相田の3人でバカなことばっかりやつてるから、3バカトリオ。もちろん命名者はアタシだ。

ヒカリは、アタシがそのシンジのこと好きなのだと言つて憚らない。

確かに子供の頃からずっと一緒にいたアタシとシンジの仲が良いところのは、自他とも認めるところ。

でも好きとか嫌いとかそういうことを考へたこともないし、シンジの口からも、そんな話しひを聞いたことはない。

一緒にいると楽しいし、居心地もよい。だけび、ドキドキすると相手を思つて物思いに耽るとか、そういうことは一切なくて。

上手く説明できないんだけど、つまりはそういう関係。

「委員長特権で、アスカと碇君がペアになれるように、くじ引きに細工しておくからね」

「そういうの特権て言わないわよ。職権乱用よ

とても楽しそうにニヤニヤしているヒカリを軽く睨みつつも、少しだけ期待してしまつのはなぜだらう。

アタシはヒカリの向こう側にある窓の外に目を向けて、キラキラと海面に反射する太陽の光に思わず目を細めた。

* * *

臨海学校は、海岸と田と鼻の先にあつた。そのためグラウンドやテニスコート等を含めたすべての敷地を囲むように、防風林である松がびっしりと植えられている。

そうは言つても、その松の囲いの内側はかなりの広さを有しているようで、防風林の圧迫感というのは、全くと言つていい程無い。建物においても、中学生が宿泊し学習する場としては、十分なくらいの外観と設備を備えていた。

もつとも、近くに寄れば海の潮風による錯があちこちに見て取れるのだけれども。

部屋割りは男子が2階、女子が3階。全部屋4人ずつに分けられた。

窓を開ければ、眩しい陽の光と潮の香り。青春の大切な数日を過ごす場所としては、悪くない。

着いて早々、荷物の整理も終わらないうちに、アタシたち学生は学習室と呼ばれる机と椅子そして大きなホワイトボードしかない、

ひどく簡潔な場所に集められた。

臨海学校というからには遊びで来ているわけではないのだけれども、あまりにも質素な空間になんかガツクリきて、アタシは思わずスンッ鼻を鳴らした。

大事なことを忘れるところだつたけど、今回の臨海学校にも一応学習目標というのがある。

「地域の歴史とそれに纏わる仏閣神社及びその他歴史的建造物について」

「地域住民の海との関わり、海の恩恵と塩害について」

「地域一帯の地盤・地層及び気候・天候について」

等々いくつある課題の中からグループ」とに決定・調査し、その成果を発表しなければならない。

臨海学校は3日間だが、最終日の午前中に研究発表会があるため、実質は今日の午後と明日の、合わせて一日半。

どう考へても付け焼刃な研究だと言わざるを得ないが、臨海学校としてはこんなものだろう。オリエンテーリングよろしく、足と耳を使っての情報収集を行うことが目標なのだから。

早速グループごとに分かれて、情報収集へと向かう。

知らない町を地図を片手に歩くというのは、ちょっとした冒険の様だ。みんな浮かれ気分で、町を歩き回る。

欲を言えば、日差しがもう少し弱い季節に訪れたかった。今日の太陽は肌に突き刺さるようで、乙女の大敵に他ならない。

研究班のグループ分けは単純に名前の順に前から4班に割り振られた。臨海学校という名目上、一応学習の場。部屋割りとの研究班割りは先生の一存で決められた。

偶然と言つかなんと云ひか、私はシンジと同じ班だ。ま、気心知れててやつやすいかな。

ヒカリは残念ながら別のグループ。

何より残念に思るのは、ヒカリと鈴原が別々のグループになってしまったということ。これで二人の関係の進展は、肝試しまでお預けか。

大きなお世話だと言わればそれまでなのだが、大好きなヒカリには幸せになつて欲しいのだ。

そんなことを考えていたアタシに、ヒカリが駆け寄る。

「アスカ、良かつたわね。碇君と同じグループじゃない。頑張るのよ」

「頑張るって何をよ？」

「碇君を狙つてる女子つて、けつこう多いのよ。ほら、同じ班になつた間宮さん、碇君のことを気に入つていろいろ噂よ。

しつかり見張つてないと、間宮さんに碇君を取られちゃうかもしないわよ？」

「と、取られちゃうも何もアタシとシンジは……」

「いい、アスカ？ いつまでも意地張つてると、本当に碇君を誰かに取られちゃうかもしないのよ」

「だから、別にアタシはシンジのことなんて何とも……」

「とにかく、頑張るのー。間宮さんになんか負けちゃだめだからね

アタシの顔を思いつきり覗き込んで力強く語ったヒカリは、メンバーに呼ばれて、慌てて後を追いかけた。

頑張れと言われてもねえ。

間宮さんがシンジに気があるとは初耳だ。
でも、確かに……そういえば、さつきから間宮さんはシンジにぴ
つたりとくつこて歩こている。シンジの広げた地図を覗き込んで。
ちょっと、ちょっと、それは必要以上にくつつき過モー。シンジ
のお人よしつ。鈍感男つ。間宮さんの魂胆も知らないで、一ノ口一ノ
しあやつて。もう少し離れりつー。

……つて、アタシ何言つちやつてんのよ。別にシンジの傍に誰が
いようと関係ない。

アタシはグループの最後尾について、のそのそと歩いた。
前方の一人をなんとなく田の端に捕らえながらボーッと歩いてい
たアタシは、突然日差しが遮られて陰になつたことに驚いた。
ハツと陰を振り向くと、そこにはアタシに覆いかぶさるよつこじ
て立つている笹本の姿がある。長身の彼がそこに立つことによつて、
アタシが彼の日陰に入る格好になつたのだ。

「なんだよ、惣流。ボーッとしてわ」

アタシは彼の顔を見上げると、

「別に」

実際に素つ氣無く返事をした。

だつて「コイツ、しつこいんだもの。なんでこんなやつと同じグループになっちゃったのかしら。

この笹本って男、長身でスポーツが得意とかで、クラスの女子からはけつこう人気がある。

でもお生憎様。アタシは全然興味がない。
自分の人気があることを鼻にかけていて感じ悪いのよね。

にもかかわらず、彼はアタシに首つ丈。これは自惚れでも何でもなく、周知の事実。
はつきりと断つたにもかかわらず、めげずに何度もアタシに挑んでくる。

以前、あまりにもしつこい笹本の追っかけに頭にきて、アタシは尋ねた。「何でアタシなのよ?」って。

そしたらアイツ、なんて言つたと思つ?

「青い瞳の彼女がいたらカッコいいじゃん」

ふざけんなつ!!

皆さんのご想像通り、アタシの怒りは頂点に達したわけで。彼の顔めがけて鞄が振り下ろされたのは言つ間でもない。
そんなこんなでアタシはこの笹本が大つ嫌いなのだ。

それなのに笹本はアタシの周りをウロウロウロウロ。そして間宮さんもシンジの周りをウロウロウロウロ。

期待を膨らませていたはずの臨海学校は、最悪な形で幕を明けた。

* * *

2日目の朝、クラスの女子の多くは半分眠ったままの頭で朝食を採る羽目になった。海辺の美しい朝日を眺める余裕なんて、これっぽつちもなく……

おしゃべり好きといつのは、女子の宿命だろつか。昨夜は遅くまで、人によつては明け方まで、おしゃべりに花を咲かせていた。女子中学生が話すことと言えば、内容のほとんどはもちろん恋の話し。みんなで感嘆詞を多用しながら、充実した時間を過ごしたのだ。

「洞木さんはやつぱり鈴原なの？」

「えっ、そんなこと……」

誰かが当然のことだと呟く様に、声を上げた。クラスの女子の視線が自分に集中したのを感じて、ヒカリは真っ赤になつて俯く。

「まだ告白してなかつたの！？」

別の方から、また別の驚きの声が上がる。
みんなも思つてたのね。ヒカリと鈴原はくつづくべきだつて。
自分の目に狂いはなかつたと、アタシはひとりほくそえんだ。

「ねえ、あなたは？」

「早く言つやいなれこみ」

そんな風に一人ずつ白状をせられていく。

頑なに発言を拒否する者もいれば、自ら声を大にして発表する者もいて、面白い。

アタシはもちろん、こう答えた。

「特になし」

「ええええつ～～～～！」

そんな非難の声が上がったが、本当のことだから仕方がない。今のアタシには、胸が苦しくなつたりドキドキするような相手がいいのだから。

シンジはどんなふうだとアタシに詰め寄つた人もいたけど、シンジにそういう感情はないとキッパリと言つてやつた。

そうしたら近くに座つていた間宮さん、

「じゃ、私が碇くん、狙つちやおうかなあ」

アタシにだけ聞こえるようにそつとつて、意味ありげな視線をアタシに寄こした。

狙つちやおうかな？ もう狙つてんぢやない、アンタ。
何でわざわざアタシに言つのよ？ 宣戦布告つてわけ？ 別にアタシはそれに乗つかるほど暇じやないけどね。

アタシはわざと聞こえない振りをした。だって、アタシには関係ないもの。

……でも、なんか……ムカつく。

朝食を終えたアタシたちは、のんびりする間もなく玄関前に集合した。

今日の予定はこうだ。

午前中は昨日と同様、足を使っての情報収集。そして昼食の後、しばし自由時間。海へ行くも良し、散歩に行くも良し、もちろん部屋でダラダラするも良し。

そして夕方からは、集めてきた情報を基にした研究のまとめを行うことになっている。

午前中さえ乗り切れば、青い海がアタシたちを待っている。

今日のためなどびつきり可愛い水着を買ってきたんだから。シンジのため息が聞こえるようだわ。

……つて、だから、シンジの感想はどうでもいいのよ。

とにかく、逸る気持ちを抑えつつ、アタシは玄関へ向かった。

今日はまた一段と暑い。外に一步出ただけで、一瞬田がくらむ。思わずフラツとなりかけた身体をなんとか立て直すと、田を細めて辺りを見回した。

「今日せどりの方へ行つてみる?」

「適当でいいよ。田舎っこ場所は昨日だいたい行つちやつたし」

地図を広げて輪になつて、みんなが相談している声が聞こえるが、アタシはその輪に加わらずに、少し離れた場所で空を見上げていた。

暑いわね。まつたく。

「昨日とは反対側へ行つてみたらどうかな?」

「うん。私もいいと思ひ。碇君が言つながらでもいい!」

顔を見なくとも想像できることに腹が立つ。語尾にハートマークが付いてるんじゃないかと思ひせど甘えた声で返事をしているのは、間違いない。間違せんだ。

なんなのよ。あの女。

暑くてみんなの話しあい耳に入らない。じつしてここに立つているだけで、なんだか眩暈がする。

今のバカバカしい発言を聞いたせいだろうか。

「じゃあ……」

いつも暑いと、何もしなくても体力を消耗する。何でもいいから、早く決めて欲しい。わざわざ出発して、わざわざ帰ってきて、アタシは早く海へ行きたい。

海で遊ぶことが、この臨海学校でのいちばんの楽しみだったのだから。

だつて……かわいい水着……買つたし。

「アスカ～、行くよ～っ」

アタシがボーッとしている間に、みんながポツポツと歩きはじめていた。シンジの呼び声に、アタシもようやくみんなの後を追う。

ヤハガハハハ。

このヤハガハの鳴き声が、体感温度をグッと押し上げる。

宿舎を出発してまだ5分も経っていないと思うのだが、昨日よりもこの日差しによるダメージが断然大きくなっている気がする。チリチリと音が聞こえそうなほどに、太陽は肌を傷つける。日差しが強すぎるのだろうか。視界に靄がかかつたように、白っぽく見える。

相変わらずシンジの隣りには、間宮さんがぴたりとくつついて歩いて。シンジも満更でもないような顔しちゃって。

もつと迷惑そうな顔、しなさいよ。いくらお人好しだからって。いくり鈍感だからって。

……バカ。

そしてアタシの隣りには、やつぱりしつこい 笹本が張り付いている。いろんな迷惑そうな顔してるのに、どこまで楽観的のかしら。せつきから自慢話ばっかり。もう聞き飽きた。

じめじめシンジが一いつひきを振り返る。心配そうな顔をして。

大丈夫よ。迷子なんかにならないから。ちゃんとみんなの後つい

て歩いてるわよ。

そんなに何度も振り返るんだつたら、笠本からアタシを救出してよ。

……バカシンジ。

アタシたちのグループが選んだテーマは『数多く点在する神社は地域住民の生活にどのように係わっているのかについて』だ。海岸線に点在する祠と山側にある神社は、地域住民の生活に密接に係わっているのだという。それを調べるために、神主さんから話を聞く回りをしているのだ。

昨日は海岸線に多く点在する祠等を見て回ったので、今日は山側の神社を回ることになっていた。

しかし、海風が通り抜ける海岸線と違い、今日のコースは、時が止まってしまったのではないかと思えるほどに、空気の流れを感じられなかつた。

空から照りつける太陽が、さらにアスファルトに反射して、熱い空気となつて身体に纏わり付く。

そんな中でも、間宮さんはシンジにべつたりで、見てるひつちが暑苦しいっての。

でもなんとか午前中を乗りきれそうだ。宿舎に帰つたら、すぐにでも出かけよう。新しい水着を着て、海へ飛び込んで。

それだけを楽しみに、この最悪な環境と状況をなんとか乗り切ろうと考えていた。

それなのに。

あと一箇所で調査終了とこりとじひめできて、アタシは自分の身体に違和感を覚えた。

なんか頭痛くなつてきた。暑い中、変なことばかり考え過ぎたかしら？

陽炎……？

前を歩いてくるシンジの後姿が歪んで見える。これだけ暑いんだもの。陽炎が立つてもおかしくないわよね。

でもね、さつきからなんだか足元がふわふわするの。まるでスポンジの上を歩いているよつな。

ほり、視界もさつきよつ暗くなつて。足を踏み出すと、やわらかいスポンジに足をとられるみたいになつて。その上シンジの姿が見えなくなつて……

えつ……？

やだ、これ……ちよつとおかしい……
ただの陽炎じゃ……

ない。

あ……れ……？

第3話

田を開けたアタシの田に最初に飛び込んできたのは、他でもない。アタシのいちばんの親友であるヒカリの姿であった。

「あつ、アスカ、気が付いた？ ピリ～、ピリかおかしなところない？」

「……ヒカリ」

ヒカリの顔が、アタシを上から覗き込む。

「もう、びっくりしちゃった。途中でアスカたちを見かけたから声をかけようと思って近づいたら、突然フラッと倒れるんだもの」

アタシ、倒れたんだ……

「さつき保健の先生が見に来てくれたけど、軽い熱中症だそうよ。それに疲労も重なって、眩暈を起こしたんでしょうって。昨夜の寝不足がいけなかつたのかもしれないわね。ごめんなさいね。気付いてあげられなくて……」

「ヒカリのせいじゃないわ。こんなに暑いんだもの。眩暈くらい起こすわよ」

「でも、たいしたことなくて良かつたあ。あつ、これ、少しずつでいいから飲んでね」

そういうてヒカリはスポーツドリンクを差し出した。

「ありがと」

自分の頭で考えるよりも早く、アタシはそれを口に流し込んでいた。この瞬間を、アタシの身体は待ちわびていたに違いない。冷たすぎず温すぎず、のどに流れる傍から身体に染みて行くような、そんな心地よさがアタシを襲う。

冷房の利いたこの部屋でひと眠りしたからだろうか。さつき外を歩いているときに感じたような、ふわふわした感覚はすっかり消えていた。

「ヒカリがここまで連れてきてくれたの？」

よつやくアタシは当たり前の疑問を口にした。

「いやだ、アスカったら。私じゃアスカを運ぶなんて無理だわ」

「じゃあ、誰が？」

「アスカのグループには適任者がいるじゃない」

「適任者……？」

そつか。 笹本か。 身体大きいもんね。 笹本以外にアタシを運べるような人間、あの場にはいなかつたものね。

不本意だけど、あとで礼を言つとくか。 あまり不要な借りは作りたくないし。

「ああ、 笹本ね」

そう呟いたアタシに、ヒカリが心底驚いた顔を向けて寄越した。

「アスカ、何言つてるのよ。他にいるでしょ？ 適任者が」

「他について言つたって、筆本以外にアタシを運べるような人……」

「体格の問題を言つてるんじゃないわ。アスカのことの大目に思つてる人がいるでしょ、つてこと」

「体格の問題じゃないうって言つたって、実際問題として、この暑さの中アタシをここまで運んで来るとなるとそれは簡単なことじやない。

アタシのことを大切に思つてくれてる人？ アタシを大切に思つてくれている人が、ここまでアタシを運んできてくれたってこと？ それって……たぶん……たぶんそれは、シンジのことを言つてるのよね？

シンジは昔からそういうのよ。アタシが怪我をしたり、病氣になつたりすると、自分のことよりもずっと必死になつて心配して。

でもだからって、シンジがアタシのことをここまで運ぶなんて、そんなことできるわけないわよ。この暑さの中、あのシンジがひとりでアタシをここまで運んでくるなんて。

でも、もし本当にそなんだとしたら……
そなんだとしたら?

「……シンジ？」

「やつとわかつたか。本当に世話がやけるんだから」

ヒカリはそう言つて「ココと微笑んだ。

「碇君、すぐ格好良かつたのよ」

「何が？」

「倒れているアスカを碇君が抱きかかえようとしたらね、釜本君が碇君に言つたの。『こんなチャンスめったにないから俺に抱かせろよ』って。そうしたら、碇君すぐ怒つてね。『触るな！ アスカに触るな！』って。

碇君があんな風に怒るの初めて見たから驚いた

シンジが？ アスカに触るなって？

「それで碇君がアスカを負ふつて、ここまで連れてきてくれたつてわけ。あとでちゃんとお礼言わなくちゃだめよ、アスカ」

アタシのこと、他人に触らせたくなかつたから？

「無理しちゃつて、バカね」

「またそんな憎まれ口利いて。いい？ 碇君にちゃんとお礼言つたのよ」

アタシのこと守ってくれたの……？

「わかってるわよ」

アタシは小さく頷いた。

「とにかく、シンジは今どうしているの？」

「たぶん海にいると思つわ」

「海？ アタシも行く……」

そう行って布団から抜け出たアタシを、ヒカリが静止する。

「アスカはダメよ。残念だけど、もう少し大人しくしてなく
ちゃダメ」

「でも……」

「本当は碇君、アスカが目を覚ますまでずっと傍にいるつもりだっ
たのよ。でも女子の部屋に碇君がずっといる訳にもいかないし。み
んなにもしつこく海に誘われて、それで」

「せつかく水着買ったのに……」

ポツリと言つたひとつを、ヒカリは聞き逃さなかつた。

「そうね。せつかくの水着を碇君に見せられなくて残念かもしれない
けど、今日は諦めてちょうどいい、アスカ」

「べ、別にシンジに見せたいわけじゃないよ。ただせつかく水
着買ったのに使わないんじゃもったいないし、せつかく海に来たの
に泳がないなんてもつたいないし、それに……」

「あら、今度碇君と一人で海に行つたらいいんじゃない？」

「だ、だから、シンジのために買つたんじゃなうって言つてゐるでしょ！」「

ヒカリつたらニヤニヤして！

他人事だと思って勝手なこと言つてくれるじゃない。他人事だと思つて……

「ねえ、ヒカリは海に行かなくていいの？ ヒカリだつて楽しみにしてたでしょ？ 海で泳ぐの」

「いいのよ、私は。アスカをおいていくなんてできないし、それに私はアスカと海へ行きたかったんだもの。アスカがいないんじゃつまらないわ」

「「めんね」

申し訳なくなつて思わず俯いたアタシに向かつてヒカリが微笑んだ。

「私が勝手にしたこと。アスカは気にしないで」

「本当に、「めんね……そ�だ！」 今度みんなで海に行けばいいのよ。鈴原も誘つて」

「す、鈴原も？」

「や。何か困ることでもある？」

「そんな……そんな」とはないけれど……

「じゃ、決まりね」

アタシの勢いに押されてか、ヒカリは真っ赤になつて小さく頷いた。さつきのよしお母さんのような態度はもはや影も形もなく。もう、かわいいんだから。

これはアタシをからかったことへの仕返し。そして、すつとアタシの傍にしてくれたことへの恩返し。これでも感謝してるのよ。あつがとい。

第4話

「こっちの席の人から、一枚ずつくじを引いてください。こっちの箱が男子で、こっちの箱が女子用です」

夕食が終わったあとの学習室は、今回の臨海学校でいちばんの盛り上がりを見せていた。これから、みんなが心待ちにしていた肝試し大会が行われるのだ。

コースは臨海学校の敷地内を一周。あらかじめ肝試し大会委員なるものが設立されていて、詳細なコースやお化けの役割等々はすでに決められている。

学級委員であるヒカリの合図と共に、くじ引きが開始された。誰かの手によつてクジが一枚ずつ開かれしていくたびに、あちらこちらで悲鳴やらため息やら、もしくは歓声等が大きくなつていぐ。

いよいよ、アタシの番がやってきた。

別にアタシは誰が相手だつて構わないのよ。でも、せつかくヒカリがクジに手心を加えたつて言つし。それを無駄にしちゃ悪いし。アタシはそういうの興味ないんだけど、でもヒカリのためにね。そう。ヒカリのために。

箱に手を差し入れると、一枚の紙を掴んで引き抜いた。

部屋を見回すと、クジを手に間頬わると向かって立つてゐるシンジの姿が目に入った。

「碇君と一緒に！？　いやあん、嘘みた～い。碇君、よろしくね！」

「うわらわ、よろしく」

なにより、シンジつたらあんなに赤くなっちゃって。こんなのに間頬さんの悪いつぼじやない。なんでシンジの相手が間頬わんなのよ。

「うわらわ。うわらわ。バカシンジ、うわらわ！　そのバカ面見て笑つてやるんだから。

相手がちょっと自分に氣があるからつて、そんなにモジモジしちゃつて。本当にバツカみたい。アタシにはどうでもいいことだけど、シンジがあんまり浮かれているからいけないのよ。だから少しくらい笑わせなさいよ。あとで精一杯驚かせてあげるから。

そんな言い掛けにも似た念を送つてゐる私に、至極申し訳なさそうな顔をしたヒカリが近づいてきた。

「うめんね、アスカ！　クジ引きに細工したはずだつたんだけど、どつかで手違いがあつたみたいで、アスカが引くはずだつたクジを間頬わんが引いたみたいで」

いいわよ、別に。アタシはシンジとペアになりたかつたわけじゃないもの。ただ、脇間のお礼を言つつきつかけになるかなつて思っただけで、別にそれ以上のことは期待してなかつたし。全然いいのよ。気にならないで。

「で、アタシ、お化けなんでしょう？」

「まさかアスカがお化けを引くなんて！ 本当に『じめんね』

「いいのよ、別に。とにかくで、ヒカリの相手は誰になつたの？」

「それがね……」

「ええっ、鈴原！？ やつたじやない！！」

「あ、あの、これは別に私が引いたわけじゃなくて、えっと私のクジと交換して欲しいって言う人がいて、それでたまたまそなつただけで……」

「きやあ～、すっごく楽しみになつてきたわ。アタシ、思いつきり驚かすから、派手に怖がつてよね。なんなら鈴原にしがみついちゃつたりしてさ。」

「そ、そんな、アスカ、何言つて……」

「で、アタシのお化け仲間は誰なの？」

「あ～、それなんだけど……」

ヒカリの言葉に絶句してるアタシを、シンジが振り向いた。もちろん爽やかな笑顔のおまけつき。

なんてタイミング悪いやつ。

でも、アタシの念もたいしたものね。ちゃんと通じてる。ほら、笑つてやるわよ。

そう思つて顔を上げただけど、シンジの呑気な笑顔を見たらそれさえも出来なくて、アタシはフンッとそっぽを向いた。

なんか、面白くない。

そういえば、昼間のお礼、まだ言つてなかつたな。

そんなことを思つたアタシの背中には、シンジに笑顔を返さなかつたことに、少しの後悔の色が浮かんでたかもしれない。誰にも気付かれてないといいんだけど。

そんな想いを振り払つよう、アタシはお化けの準備のために学習室を後にした。

「もう、信じらんない！！

怒りというか、嘆きと言うか、ひとり興奮冷めやらぬアタシは、花壇の植え込みに身を潜めて咳いた。

お化けのクジを引き当てただけじゃなくて、その相手がよりによつて 笹本だなんて。アタシのクジ運の悪さにも程がある。こんな暗闇で 笹本と二人っきりだなんて、何されるかわかつたもんじゃないわ。

一人で息巻いていると、遠くから肝試し大会スタートを知らせる笛の音が聞こえた。

ちょっと、 笹本つたら何やつてんのよ。 もう始まっちゃうの。 ってのう。 アタシを待たせるなんて、いい度胸じゃない。まあこんなお化けの

仕事、ひとりで十分だけど。

アタシの足元には氷水の入ったバケツと、園芸用のノズルの長い霧吹き。ここの霧吹きを使い花壇の前を通る人の足を狙って、冷たい水を一吹きするのだ。

ここの程度で驚く人、いるのかしら？

笛本が到着するより早く、一組田がやつて来る声が聞こえた。「きや～っ」とか「わあああっ」とか、そんな声が近づいて来る。こんな子供だましの肝試しで、真剣に驚くやつがいるのね。

そんな変な感心をしながら、アタシも前のお化けたちに倣つて、彼らを驚かせることに尽力する。

花壇の隙間からノズルを伸ばし、足をめがけて冷水をひと吹き。

「おおおつっ……」

「きやあっ……」

おっ。これは、意外と……

アタシは彼らの悲鳴に軽い快感を覚え、これ以降はかなり真剣にお化けを演出した。一組田も三組田も、面白いように悲鳴を上げる。手の込んだものよりも、こいつは単純なものの方が恐怖を煽るのかも知れない。

それにしても笛本のやつ、何やつてんのよ。後で覚えときなさいよ。

ふと冷静になつてみれば、辺りは真っ暗。居る場所がバレてしまつては困るから、もちろん明かりはつけられない。お化けに驚かさ

れるよりも、ここに「お化けをしている方がずっと怖いのではなか」と思えてくる。

いくらなんでも女一人でここに隠れてるのって、危険よね。敷地内とは言え、か弱いアタシが一人でこんなところに居るのって……ああ、もう釜本でも何でもいいから、早く来い！ 一人で居るよりは、きっとマシ。

そのときだつた。背後からガサツと葉を揺らす物音が聞こえた。

アタシはビクッとして振り向くと、田を凝らす。黒い影が近づいてくる。たさもと……？

もつと小さな黒い影。釜本じゃない。やだ、何？ 誰？

アタシは身を硬くした。

「遅くなつて」「めん、アスカ」

ん？ ここの声……

「シンジ！？」

「ごめんね、アスカ。一人で怖くなかった？」

シンジはそう言つて、驚いて大きく田を見開いているアタシの隣りにしゃがみ込んだ。

「な、何でシンジがここにいるわけ！？ シンジは間宮さんと一緒に組だつて……」

「そうなんだけど、僕、間宮さんてなんか苦手だし、それに……」

「それに？」

「アスカの相手が笹本だって聞いて、それってちょっと嫌だなって思つて」

「どうしてアタシの相手が笹本だと嫌なの？」

「だってアスカ、 笹本が傍にいると迷惑そうな顔してたし、だから嫌なのかなって」

……なんだ。気付いてたんだ。

「シツ」

アタシは自分の指を口元に当てたまま、もう一方の手で冷水を噴射した。

「あっ、ごめん。お化けやらないとね。ここを通る人にこれを吹きかければいいの？」

シンジはなんだかやけに楽しそうな顔をして、霧吹きを構える。

「なんだかドキドキするね。こうこうの。驚かされるよりも、驚かす方が楽しいかも」

まったくもう。子供みたいな顔しちゃって。アタシの口から、思わずクスクスと笑い声が漏れた。

「ん?
何?」

「べつに」

本当に、バカなんだから。
……バカシンジ。

第5話

「それにして、よく笠本が代わってくれたわね？」

「あ、それは……ちょっとね……」

「ちゅうとうて、何？」

「うん。ちょっとね

「ふうん」

アタシは霧吹きを正面に構えたまま、小さな声で呟く。

「あっがと」

「何が？」

「倒れたアタシを運んでくれたの、アンタなんでしょう？」

「あ、う、うん……」

シンジは少し慌てて返事をして、そして急にアタシから皿を逸らした。

「ぬじやなつ。ちゅうとうでそんなん濡れてんのよ。」ひがが恥ずかしく

「とかく、あっがと。アタシ、重かったでしょ？ 無理しないで

「 笹本にでも運ばせとかば良かつたの?」

「 ありがと?」だけにしておけばいいのに、余計な台詞が口を吐いて出た。

これはアタシの照れ隠し。アタシの悪い癖。

そんなアタシの言葉に、過剰なまでの反応を見せたシンジに驚いた。

「 そんなことできなこよー。」

シンジ……?

「 な、なんで怒るのよ?」

「 アスカがおかしな」と叫びからだよ

「 何よ。ほんの[冗談じゃない」

そり。[冗談。そんなの本心じゃないもの。アタシの悪い癖で、思わず口から出してしまつただけで。

本当はシンジにたくさん感謝してる。だから一緒に笑い飛ばして欲しかったの!』

「 [冗談でもそんな」と叫びつなよ」

こいつになぐ、シンジの軒はアタシの胸に突き刺さった。

「 だから、なんでそんなに怒るのよ……。」

アタシは思わず霧吹きを胸に抱えて。お化けだつてことを忘れちゃうくらい、それはアタシに衝撃を及ぼした。

「嫌なんだよ……」

「嫌つて何が?」

「誰にもアスカに触つて欲しくないんだ」

「何言つて……」

「だつて、嫌なんだよ。アスカが倒れたとき、笠本がアスカを抱き上げようとしたのを見て、それだけは絶対に嫌だと思つたんだ。僕以外の誰かがアスカに触れるなんて、そんなの絶対に嫌だつて」

アンタ、何言つてるかわかつてゐるの? それはどういう意味か、わかつて言つてるの?

「何で、嫌なの……?」

「なんでだらう……今までそんなこと考えたことなかつたけど、でもあの時、アスカに伸ばされた笠本の手を見たとき、僕以外の男がアスカに触れるなんて、絶対に嫌だと思つた。アスカに触れていいのは、僕だけだつて……」

アタシの聞き違ひじゃない。隣りにしゃがんでいるシンジはアタシのことをじつと見つめて、確かにそう言つた。

それを聞いたアタシは、すごく驚いて、息が詰まりそうになつていや、そうじゃない。すごく嬉しくて、胸が苦しくなつたんだ。

だつて、アタシも思つたんだもの。シンジがアタシを運んできて
くれたつてヒカリに聞いたとき、アタシも確かに思つたんだもの。

アタシを運んでくれたのがシンジで良かつた、つて。シンジに運
んで欲しかつた、つて。

アタシたちの口口口のベクトルは、同じ方を向いてたのね。ずっと。

アタシは震える声を隠して、自分の言葉のその意味をわからない
でいるバカシンジに向かつて呟いた。

「バカね。それって、好きつてことじやない」

アタシの言葉にシンジは心底驚いた顔をして、それから俯いて一
人ほくそえんだ。

「そつか。これが好きつてことなのか

「そうよ、それが好きつてことなのよ」

自然と笑みがこぼれる。アタシも、シンジも。きっと同じ気持ち
だから。

お互に小さく微笑み合つたとき、思いがけずシンジが苦痛の声
を上げた。

「痛つ……」

「どうしたの？」

声と同時に右手で口元を押されたシンジの顔を覗き込む。

「あつ、ちよつとね」

「ちよつと見せなぞこよ」

「大丈夫だつてば……」

「ほりひ、見せて」

アタシはシンジの手を無理矢理どかすと、顔を近づけて目を凝らした。アタシの目はすっかり暗闇に慣れていたので、これくらい近づけば、明かりがなくてもなんとか見える。

口元が、なんか少し黒ずんで……

「アンタ、唇の端切てるじゃないつ

「あ、うん……」

「『あ、うん』で、どう切ったの？ 転んだの？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

「じゃあどうこうわけよ」

「たいしたことないから大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないわよ。こんなところ怪我するなんて、子供じゃない
るまいし。何があったの？ 正直に白状なさい」

「だから、大丈夫だつてば」

「いいから話なさい……」

「わ、わかつたよ……でも誰にも言わないでよ」

「いいわ。約束する」

「実は……」

「はあ？ アンタ、バカじゃないの？」

「だから言いたくなかったのに……」

シンジの話を要約するところだ。

笛本にクジを交換してくれと頼んだのだけど、案の定、拒否。し
つこく食いつづがるシンジに、笛本が一つの条件を出した。クジを交
換してやる代わりに一度殴らせり、と。

「で、アンタは『はじそですか』と顔を差し出したつてわけ？」

「だつて、そうじないと代わつてくれないって言つからい……」

「まひ、もう一度見せて」

「ええ、もうこいつあ」

「ここから見せなさい。」

アタシは顔を近づけてその傷をもう一度眺める。
アタシのために、負った傷。本当は喜んじゃいけないんだけど、
でも、嬉しい。これがシンジの意志の証なんだもの。嬉しくないわけがない。

手を伸ばして、その傷にそっと触れる。
痛かつたくせに、やせ我慢しちゃつて。

でも、そつこうの、嫌いじゃなこわよ。

自分でも驚いたんだけど、そんなことするつもりなかつたんだけど、アタシの箇は、そつとその傷に重ねられていた。

「あ、アスカ……」

呆然としたシンジの声に、ハッと我に返ると、アタシは慌てて飛び退いた。

「あ、あ……」「これは……その……お、おまじないっていつか……そう、あの……怪我が早く治りますよ!おまじない!」

「あ……つがと」

なんて話を続けていいのかわからなくて、どんな顔をしたらいの
かわからなくて、アタシは霧吹きを胸に抱え込んだ。

お化けだつてことをすっかり忘れちゃつてたから、霧吹きの中の水はまだ沢山残つていて、容器の周りは汗をかいて、その滴がアタシの服を濡らした。

「そういえば、アタシ、お化けだつたんだっけ。何組目まで終わつたんだろ?」

「ねえ、知つてる?」

膨張しきつた頭を冷やそうと必死になつてゐるアタシに、シンジが尋ねた。

「」の肝試し大会でカップルがたくさん生まれるって話」

「知つてるけど?」

「あれつて、みんなは肝試しと一緒に回つた人同士が結ばれるつて思つてるみたいだけど、本当は違うんだよ」

「どうこうこと?」

アタシは思わずシンジを振り向く。

「一緒に回つた人が結ばれるんじゃなくて、お化けと一緒にやつた人同士が結ばれるつて話なんだ」

シンジはまるで見てきたかのよつて、自信のある口調で話を続けた。

「なんでシンジにそんなことわかるの?」

「だつて、知つてゐから」

「知つてゐて、何を?」

「『』の肝試し大会で結ばれた人たちを、だよ」

「それは……?」

遠くから笛の音が聞こえた。肝試し大会終了の合図。

「あつ、終わつたの合図。お化けの仕事、ちゃんとやらないで終わつちやつたね」

シンジはアタシの質問に答える前に、小さく笑いながら立ち上がる

「や、戻るわ」

そう言つてアタシに向かつて手を伸ばした。

でもアタシはなぜだか手を伸ばせない。アタシの口元はシンジに向かつてゐのに、おかしいわね。

そんなアタシに、シンジは尙も声をかけた。

「ほら、アスカ」

優しくシンジの声に、思わずシンジの顔を見上げる。声だけ

じゃなく、その笑顔もとても優しくて。アタシは差し出されたシンジの手を少し眺めて、そして、シンジの手のひらに自分の手のひらをそっと重ねた。

* * *

シンジは気が付いてたかしり？

「ほい」

そう言つてあの時あなたが差し伸べてくれたその手は、アタシの幸せなものだったのよ。

アタシたちもいつまでも語り継がれる一人でいたいわね。
シンジのお父さんとお母さんのよう。ね。

第5話（後書き）

最後までお読みくださって、ありがとうございました。拙い作品ですが、少しでも幸せな気持ちになつていただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115v/>

ココロのゆくえ

2011年10月9日13時49分発行